

指導者（保護者）として大切にしたいこと（その24）

～「審判・コミッショナーへのリスペクト」～

2020年11月吉日

U12部会広島地区SV 大庭 浩資

広島県バスケットボール協会U12部会広島地区の保護者の皆様、指導者の皆様、役員の皆様、いつもお世話になっております。

また、各チームの練習におきましては、「新型コロナウイルス感染予防に伴うガイドライン」に従って活動をしていただいておりますことに、心より感謝申し上げます。

11月1日から始まった広島地区大会も予選を終え、いよいよ21日から決勝大会が始まります。

このコロナ禍の中、多くの皆様の努力により大会が行われること、子ども達が一生懸命にボールを追いかける姿を見ることができると素直に喜びたいと思います。

一方で、新型コロナウイルス感染者についての報道は、広島地区でも毎日のようになされています。指導者も保護者も、決して油断することなく、「新型コロナウイルス感染予防に伴うガイドライン」に従っての活動を今後も続けてまいりましょう。

さて、私もチームの指導者としてこの大会に参加していますが、先日の試合中、大失敗をしてしまいました。

それは、コミッショナーが赤旗を挙げ、両チームのコーチへの説明が行われた後のことです。赤旗は相手チームが対象であったため、コミッショナーが相手チームのコーチに詳しく説明を行っている間、自分のチームの選手はコート上にぼんやりと立っていました。

以下は、その時のやり取りの様子です。

私 「(選手へ向けて)自分たちもしっかり足を動かして、守るんだよ。それからもっと強いパスをして、展開を速く・・・」

審判「すみません。今、指導をするのはやめてください。」

私 「今、選手に声をかけてはいけなのですか？(少し強めの口調で言ってしまいました)」

審判「すみません。私もよく理解できていないので、後で確かめます。」

私 「相手チームへの説明中なので、自分のチームの選手に言葉をかけたのですが・・・」

ここで、コミッショナーの説明が終わり、試合は再開されました。

試合が終了して控室へ戻ると、瀬野ミニバスの東さんがいらっしゃったので、その時の様子を話し質問したところ、「あの時間は、コーチは一言も指導をしてはいけません。指導をする時間ではありません」とはっきりと答えてくださいました。

しまったと思った私は、すぐに審判の方を探し、先ほどのことを謝罪しました。幸い、笑

顔で快く謝罪を受け入れてくださり一安心しましたが、本当に申し訳なく、冷や汗をかいた時間でした。と同時に、自分の知識不足からその審判の方へ嫌な思いをさせたことを深く反省しました。

すると、その翌日（11月8日）、中国新聞に広島東洋カープの石原慶幸捕手（41）の引退試合の記事が載っていましたが、その記事の内容が、何か自分自身へのメッセージに感じ、改めて自分の行為を振り返ることができました。そしてこの内容は、指導者や保護者の皆様にもぜひ知っておいてほしいと思ったので紹介します。

11行目から書いてある、「この日の試合後、審判団が石原を囲み、労をねぎらっていた。引退試合で初めて見る光景だった」は感動ものです。

ミニバスケットボールの試合の後、コーチと審判・コミッショナーが握手をする（今の状況ではできませんが）場面をよく見かけますが、指導者や保護者として、試合でお世話になった審判・コミッショナーへのリスペクトは絶対に忘れてはいけませんね。

### フェアな捕手 去り際も

感傷に浸りながら、数年前の一場面を思い出している。勝負どころで際どいところに投げられた球。ボールの判定にジョンソンは手を広げ、アピールする。記者席からも入っているように見えたが、石原は何事もなかったように素早く球を投げ返した。翌日、聞いた。「だって、外れていたから」。

その日以来、私はストライクかボールかは石原のしぐさから判断するようになった。周囲をだまそうとしない姿勢。球審と話す時は「リスペクトが必要」と肩越しではなく、振り返って目を合わせた。捕球時もミットを内に動かさない。フェアな捕手だった。

ネット上では熱心なファンが、そのしたたかなプレーを「インチキがうまい」と称した。19年も第一線にいる理由として、その側面もあろう。だが取材する限り、印象は違う。この日の試合後、審判団が石原を囲み、労をねぎらっていた。引退試合で初めて見る光景だった。

晩年、ベンチを温めた。ガムをかまない理由は「(外からの) 見た目がね。口寂しい時はあめをなめているよ」。

セレモニーに現れた黒田、新井の両氏も決してガムを口にしなかった。古い価値観を持つ選手がまた一人、広島からいなくなった。